

優秀賞

私にできること

桶川西小学校六年 青柳 優莉香

毎朝、私の通学班には、
「おはようございます。」
や

「今日も学校がんばってね。」
と、ニコニコと元気にあいさつをして、登校
を見守ってくれるおばあさんがいる。雨の日
も、暑い夏の日でも、一日も休まずにおばあ
さんがあいさつをしてくれると、
「今日も一日、始まったな。」
と、感じる事ができる。

ある夏の日の下校中、おばあさんが家の前
で、うずくまってたおれているのを発見した。
そこには、先に近所の方が一人、おばあさん
の肩を支えていた。私はおどろいて、その場
に立ちすくんでしまった。なぜなら、家族以

外で体調が悪くて、たおれているのを見たこ
とが初めてだったからだ。私は、おばあさん
のところ近くに近づくか、このまま気がつかない
ふりをして家に帰ってしまおうか、一瞬迷っ
た。私が声をかけたところで、力になれるの
か不安があった。けれど、助けなかったら、
「あの時、声をかけてあげれば良かった・・・。」
と後悔するの、いやだなと思ったので、勇
気を出して声をかけた。

「大丈夫ですか。」
と聞いてみると、おばあさんは震えた小さな
声で、

「大丈夫。」
と答えた。どうやらおばあさんは、熱中症に
なっていたようだ。近所の方が、救急車を呼
んでいる間に私は、日差しが当たらないよう
に日がさを差して、日かげを作ったり、気持
ちが悪くならないように、肩をさすってあげ
たりした。救急車のサイレンが近づいてきた
時には、場所が分かるように手をあげて誘導
した。その後、救急隊が来て、おばあさんは
「ありがとう。」

と何度も言っつて、病院へ運ばれていった。家に帰った後、私は、おばあさんは大丈夫だったのかなと心配したり、もつと他にできたことはなかったのかなと思ったりして、色々な気持ちで混ざって、複雑だった。母に話すと、「心配だね。でもよく声をかけられたね。」と、ほめられた。母の言葉で、自分の行動は、まちがっていなかったのだと、自信をもつことができた。おばあさんは、その日のうちに元気になったと連絡が来て、安心した。

二日ほどたち、また「おはよう。」

と、通学班を見守るおばあさんを見て、「元気になって良かったな。」と心から思えた。

私には、医療従事者のように、人を助けることはできないけれど、今回のように、小さなことかもしれないが、

「大丈夫ですか。」

と、勇気を出して、一言声をかけるといふ、私にもできることがあると知った。

これからも、困っている人を見かけたら、

自分にできることは何だろうと考えて、行動することが、私にできることだ。